

地域情報（県別）

【新潟】「佐渡の医療を守りたい」市から委託受け診療所を運営-野沢有二・Omni Color Opus代表に聞く◆Vol.1

新潟市でもクリニック運営、介護事業も

2025年11月10日（月）配信 m3.com地域版

佐渡市と新潟市で医療活動を行い、新潟市では介護事業も展開する医師がいる。医療福祉グループ「Omni Color Opus」代表の野沢有二氏は、東京都の小笠原村診療所の勤務でへき地医療の魅力を知り、2013年から佐渡市でも診療を続ける。その活動は島民からも支持され、勤めていた診療所の閉院が決まった時は住民が行政に直談判、新たな診療所開設につながった。「医師としての特性が島にぴたりとはまった」と話す野沢氏に、現在までの経緯を聞いた。（2025年10月2日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



野沢有二氏

父の急逝で父島から故郷・新潟に戻ることを決意

——野沢先生は現在、新潟県佐渡市と新潟市で医療活動を行い、新潟市では介護事業も展開しています。まずは、2013年から佐渡市の診療所に勤めた経緯をお聞かせください。

私は大学卒業後に関東で働いていましたが、新潟市で開業医を務めていた父が2012年に急逝したことをきっかけに、故郷に戻ることを決めました。佐渡市で医療を行うようになったのは、知人からの相談がきっかけです。「佐渡に医者が少ないから手伝ってくれないか」と言われて、佐和田病院と小木クリニックに整形外科医として勤務するようになりました。私は父が新潟市で築いてきた地盤を受け継ぎ、自分なりの形で事業展開しようと考えていたので、佐渡市での勤務は短期的なイメージでした。

しかし、私の特性が佐渡にぴたりとはまりました。私は過去、へき地医療に携わっていました。2011年から約2年間、東京都小笠原村父島にある小笠原村診療所に勤め、2012年からは所長を担いました。父島と佐渡では島の雰囲気が違いますが、島民の方々と触れ合い、患者さんの生活と近い距離で医療を行うこと、幅広くいろいろな病気や悩みに向き合っていく、といった医師としてのベースが佐渡でも合ったんです。

佐渡市では整形外科医が不足、治療による改善の余地大

——先生が2025年4月に立ち上げた医療福祉グループのブランド「Omni Color Opus（オムニカラーオーパス）」のホームページによると、佐渡市では2013年当時、「少しの治療で改善する状態や慢性疾患が放置されている状況だった」といいます。

佐渡市には当時5万人以上が住んでいましたが、整形外科を標ぼうする診療所は1軒しかありませんでした。その一方、島には一次産業に携わる人が多いこともあり、整形外科疾患を抱える人が多くいました。変形性膝関節症や変形性腰椎症、脊柱管狭窄症などに対して適切な医療が提供されていない状況を見て、私は整形外科医として悔しく思いました。何も治療されていないということはつまり、「改善の余地が大きいのに」と感じたわけです。

「自分が一人一人しっかりと診療し、患者さんに改善することを伝えよう」。気持ちを切り替えて治療を継続していくと、患者さんの状態は見違えるほど良くなっていました。その時の患者さんの喜びようはすごかったです。島では整形外科専門医の治療を受ける文化が乏しかったこともあり、口コミで患者さんは増えていました。父島もそうでしたが、島の人は外部の人間の受け入れに抵抗のある人が少なくありません。しかし、いったん関係を築けるとすごく温かい。「これ食べて」「あれ持って行って」「米は足りているか」「魚が取れたぞ」——。私の考えは次第に変わってきました。「この地域の方々は、自分がいなくなるとどうなってしまうのだろう。手が届いていない佐渡に医療を提供し続けなければ」。そう思うようになりました。

住民の訴え聞き、市が小木地区に診療所を開設

——過去の報道によると、先生は2020年に佐渡市が開設した「佐渡市小木診療所」の運営を委託され、以来、同院で管理医師を務めています。

佐和田病院と小木クリニックを運営していた医療法人が、経営難から両院の閉院を決めたことがきっかけです。2019年の秋にその知らせが私の耳に入り、小木クリニックは翌年1月に閉めるとのことでした。あまりに急だったので私も驚き、「通っている患者さんたちはどうなるのですか。地域への影響を抑えるため、もっと時間をつくれないでしょうか」と法人の上層部に相談しましたが、状況は変わりませんでした。

「私も佐渡を去ろうか……」。そう考えていた時です。私のそれまでの活動を支持してくれていた地域の方々が中心となり、行政に掛け合ってくれました。「先生を帰さないために」と、小木地区で引き続き診療できる環境をつくてほしい旨を佐渡市に要望してくれ、議員の方も力を尽くしてくれました。結果、市が地区内にある福祉保健センターの一角を改修し、2020年5月に「佐渡市小木診療所」を開設、私が運営を担うことになりました。小木クリニックの閉院決定からわずか半年ほどのことです。「奇跡的な展開だ」と感動したことを鮮明に覚えています。



2023年、新潟市にクリニックを開設

——その後、医療法人社団「ibis（アイビス）」の理事長として2023年、新潟市に「こばり坂クリニック」を開設します。「新潟市でも医療を」と思い続けていたのですね。

こばり坂クリニックを開く前にも新潟市の医療には関わっており、新潟市医師会が運営する「新潟市急患診療センター」の活動に参加していました。急患センターは医師会に加盟する開業医の先生を中心とした先生にも手伝っていただき、持ち回りで運営されていますが、自院の診療で忙しく、センターでさらに診療することを負担に感じている方も少なくありません。一方の私はいろいろな患者さんや救急患者さんを診るのが好きで、父島と佐渡での経験から幅広く診療することに慣れています。そこで、医師会に提案して了承を得、急患センターでも診療を始めたわけです。

私は当時から週に3日、平日に佐渡市で診療していたので、土日や祝日、年末年始など先生方の稼働が難しそうな時に率先して診療を申し出ました。先生方は私の提案とイレギュラーな参加の形に最初は驚かれていたようですが、診療を重ねるにつれ「とても助かるよ」と喜んでくださいました。

こばり坂クリニックを新潟市西区に開いたのはその後です。「自分の特性を生かしたクリニックをつくろう」と“地域医療・スポーツ医療の両立”を掲げ、新潟医療センターで整形外科部長をお務めになった渡邊聰先生を院長に招いて理学療法士も雇用し、2023年に開業しました。西区ではこのほか、社会福祉法人の理事長として特別養護老人ホームを2つ運営し、また株式会社の役員として障害者グループホーム3つの運営にも携わっています。地方やへき地での人材不足が深刻さを増す中、地域の健康を支えていくためには医療・介護・福祉が連携していくことが重要だと考えます。まずは西区でこれらの連携を実践してモデルケースをつくり、その輪を広げたい思いがあります。



こばり坂クリニックの外観

◆野沢 有二（のざわ・ゆうじ）氏

2000年埼玉医科大学卒。武藏野総合病院や亀田総合病院の整形外科を経て、2011年に小笠原村診療所に勤務。2013年に故郷の新潟県に戻り、佐渡市で医療活動を開始。2020年から佐渡市小木診療所管理医師。新潟市でも医療・介護事業を行う。日本整形外科学会整形外科専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太（写真は野沢氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

